

咸臨丸のサンフランシスコ航海を成功させた

アメリカ海軍大尉

J·M·ブルック

元東京商船大学教授

橋本 進

「咸臨丸難航図」
(木村家所蔵、横浜開港資料館保管)

随伴艦・咸臨丸

安政5年6月19日 (1858年7月29

日) アメリカ総領事タウンゼンド・ハリス
と幕府委員(下田奉行・井上信濃守・清
直・海防掛目付・岩瀬肥後守・忠震)との
間で日米修好通商条約が調印された。
そして、批准書交換はアメリカの首府ワ



キャプテン・ブルック

咸臨丸乗組を命じられた軍艦奉行。

木村撰津守はその慎重な性格から、日本人だけの手でいきなりサンフランシスコ航海を実施するのは無理であると見て、早くから老中を通じてアメリカ公使タウンゼンド・ハリスに適当な案内者を依頼していった。そこへ推薦されてきたのがアメリカ海軍大尉ジョン・マーサー・ブルック (John Mercer Brooke) であった。

ブルック大尉は嘉永6年 (1853) ベリー来日当時、ヴィンセネス号を旗艦とする5隻の水路探検隊の船隊航海士として中国、日本からベーリング海まで航海したが、今回は先の水路探検隊の最

シントンで行い、そのためには日本から1年以内に使節を派遣することが決められた。

安政6年9月1日、遣米使節に新見
豊前守、村垣淡路守および小栗豊後守

の3名が任命され、一行77名はアメリカからの迎えの軍艦ポーハタン号に乗艦し

て渡米することとなたが、同時に幕府

は自ら別艦1隻を仕立てて、使節の警護という名目かたがた遠洋航海による

海上訓練を兼ねてサンフランシスコまでボ

ーハタン号に随航させることになった。そ

の随伴艦として選ばれたのが咸臨丸である。

咸臨丸太平洋横断150年

小艦であった96トンのスクーナー船フニモア・クーパー号の艦長（キャブテン）となつて、1858年の秋サンフランシスコを発港して、ホノルル、マニラ、香港、琉球近辺の測量を続けながら、1859年7月下旬に神奈川に着いた。

これらの経験からもわかるように、當時33歳のブルック船長（以後、キャブテン・ブルックと呼ぶ）は熟練した帆船乗組であるばかりでなく、アメリカ海軍隨一の北太平洋横断航海経験者であった。なお、当時の日本では太平洋を太平海と呼んでいた。

彼の次の任務は、アメリカ公使ハリスが開港の約定を取り付けた神奈川、箱館、長崎、新潟、兵庫（神戸）などの港の測量であった。キャブテン・ブルックがその交渉のために江戸に赴いた留守中の1859年8月7日、神奈川沖に停泊中のアマ・クーパー号は暴風雨のため走錨し、陸岸に座礁した。幸い人命と航海用器械類は救うことができた。2週間後に離礁させたが肋材39本が破損し、他の損傷もひどく修復の見込みが立たないので競売に付された。キャブテン・ブルック一行は神奈川に仮宿して帰国便を待っていた。

咸臨丸乗艦の経緯

それから半年間、キャブテン・ブルック

は空しく横浜に留まっていたといふが、アメリカ東印度艦隊司令官ジョンシア・タットナル提督から、咸臨丸乗艦の命令書が届いた。（万延元年遣米使節資料集成 第五卷所載）

江戸湾 一八六〇年一月七日 拝啓

日本政府の要望により、又貴下の希望も考慮し、ここに日本蒸氣艦咸臨丸のサンフランシスコ航海につき、その艦長に援助を与える目的を以て貴下に対し同艦に乗組むことを命じる。

東印度艦隊指揮より帰還中の提督ジョン・タットナル

平穏な航海を祈る。

指揮官大尉ジョン・M・ブルック殿

だから、ブルックは「日本政府の要請とタツナル提督の命令で、航海技術などについて艦長を援助する目的で咸臨丸に乗艦した」という自負を持っていた。

しかし、木村奉行と勝艦長以外の乗組員にはそういう認識はなく、単なる便乗者としか見ていなかつた。

キャブテン・ブルックの決意

1860年2月10日、浦賀を出航した咸臨丸はすぐさま強烈な荒天に遭遇した。その状況をブルックの航海日

記『咸臨丸日記』(KANRIN MARU JOURNAL・万延元年遣米使節資料集成・第五卷)で見てみよう。

二月十一日 (旧暦正月二十一日)

明け方目を覚ました。船は激しく縦揺れしている。テッキに出てみると、

二段縮帆したメーントップスル（大檣のトップスル）が裂けていた。その帆を畳む。フォースル（前檣の大帆）の半分も破れている。それも畳む。：

(略) 日本人は全員船酛いだ。提督（木村）はまだ自室にいる。艦長（勝）も同様。

二月十四日 (正月二十二日) ..

(略) 日本人が無能なので帆を十分に揚げる事が出来ない。士官たちは全く無知である。：(略)

二月十六日 (旧正月二十五日) ..

(略) 船の中で、秩序とか規律とかいうものは全く見られない。事実、わが國の軍艦に見るような規律とか秩序とかは、日本人の習慣に相容れないものだ。日本人水夫は船室で火鉢と、熱いお茶と、煙管^{キセル}などをそばにおかなければ満足しないのだ。：(略) 艦長はまだ寝台に寝たきり、提督も同様。士官たちはドアを開け放しにし、それがバタバタんとおり、自分たちのコップや皿や、やかんが床の上を転げ回るに

まかせ、全くだらしのないJと音語回断。：(略)

二月十九日 (正月二十八日)

日の夕方、私は日本人たちの無神経さに全く驚かされた。暴風の光^{ホル}が引き現れているのに、ハッチ（船倉開口部）もしつかり閉めていないし、そのうえ羅針箱（操舵用磁気コンパス箱）の明かりも非常に薄暗いままであった。

二月二十日 (正月二十九日) 今日私は水夫や士官の当直を割り当て、部署を決めるよう提案した。しかし予期しなかつた困難にぶつかった。尉官級の六人の士官のうち、何人かは職務に全く無知である。提督は能力のある者を当直につけたがらない。つまり彼らが無能な者ほどに身分が高くないからといつのである。結局、提督は誰にも部署当直をつけたがらない。

提督自身も船舶運用に関する知識がない (The Commodore knows nothing whatever of seamanship)。彼は私が船を動かす事ができるのだから安心だと思っていた。(略) とはいって、私は下船するまでに、何とかこの点を議論して改めさせよ。

キャブテン・ブルック自身も船を動かす事ができるのだから安心だと思っていた。(略) とはいって、私は下船するまでに、何とかこの点を議論して改めさせよ。

ここで初めて「シーマンシップ」の言葉が出てくる。ブルックの言うシーマンシップは、彼が日記の中で並べ立てた咸臨丸乗組員に対する不満、すなわち、乗組員の船内マナーの悪さや船内の無規律さ、拙劣な運航技術などを総称していることは明らかである。

ブルックは、自分がサンフランシスコで下船するまでの間に、咸臨丸乗組全員にシーマンシップを教えるよう決意した。そこには自分がサンフランシスコで下船した後の咸臨丸を、無事日本へ帰着させるための熱い願いが込められていた。

キャプテン・ブルックと飲料水事件

咸臨丸は順調に東航を続け、西経一七〇度の子午線を越えて航海も半ばを過ぎていた。このとき飲料水にまつわる事件が起きた。

「…（略）もともと咸臨丸のタンクには限りがあることですし、途中から、水は飲用のほかには使つてはいけないと、勝艦長から命令が出ました。ところが、アメリカの帆縫水兵のフランク・コール（帆縫工）というのが、この貴重な水を使って、自分の下着の洗濯をしているところを見つけた吉岡公用方（事務官）は、いきなりこの水兵

の顔を足げにしたのがきっかけで、この水兵は何かわめきながら仲間を呼びに行つて、連れてきたかと思うと、吉岡に向かつてピストルをかまえ、吉岡も刀の柄を握ったところに、何事が始まつたかと、日本の士官たちと勝艦長、万次郎もやってきましたし、それにキャプテン・ブルックも出て來たのです。ことこの次第を聞いたキャプテン・

ブルックは、がやがやさわぐ自分の部下たちを制して、静かに日本側に向かつて、よろしい斬つて下さい。といって共同生活のおきてを破つた者に対して、落ちついて進んで処刑を求めるのでした。

この事件は、勝艦長とキャプテン・ブルックの握手となつて納まりました。が、この三十三歳のアメリカ海軍中尉（大尉の誤り）に対する日本士官たちの見目は、それ以来変わってきました。（『中浜万次郎の生涯』中浜明、富山書房）

この話の出所は定かでないが、木村奉行の従者であつた福沢諭吉も似たような話を『福翁自伝』に書いている。それにしても、元測量艦フエニモア・クーパー号艦長としてのブルックの毅然とした態度は見事ではないか。武士が武士道を貫くにも似たこの対応に、咸臨丸

キャプテン・ブルックのシーマンシップ教育とその成果

咸臨丸がサンフランシスコに到着後、ブルックは海軍長官アイザック・トウシイに書簡を送り、次のように報告している。

小官は咸臨丸に搭乗し、江戸湾を出发してより三十七日の航海の後、今日十七日にサンフランシスコ港に到着しましたことを謹んで海軍省に報告いたしました。…（略）

日本人達は航海術や船の運用に関してオランダ人から教えを受けていり拘わらず、この咸臨丸の乗組員は各自の部署が決まつておらず、ひどい嵐の中を船が風にのり大浪を切つて走っている時も、しばしば二、三人の乗組員しかデッキにおりず、出港後（空白）日たつてから、ようやく士官達が当直に立つようになりました。それまでは、たまたま何かやりたい気持ちになつた人が見張りに立つという状態で、これは全く驚くべきことであります。

ブルックが考えた木村奉行をはじめとする咸臨丸乗組全員に対するシーマンシップ教育は見事に成功したのである。また、ブルックは咸臨丸乗組員のことを好意的に報告することはあつても、彼が日記に書いたような日本人乗組員に対する不平、不満、不信を外部に漏らすことにはなかつた。

ブルックが考えた木村奉行をはじめとする咸臨丸乗組全員に対するシーマンシップ教育は見事に成功したのである。また、ブルックは咸臨丸乗組員のことを好意的に報告することはあつても、彼が日記に書いたような日本人乗組員に対する不平、不満、不信を外部に漏らすことにはなかつた。

偉丈夫は偉丈夫を知る

軍艦奉行・木村撰津守は日記『奉使米利堅紀行』（『幕末軍艦咸臨丸』所載）のなかで、キャプテン・ブルックについて次のように述べている。

甲比丹ブルーク近曰其都府に帰らんとの由なれば、予聊旅舎に於いて送別の宴を設たり。（中略）予此人の良友懇篤なるを感じしは航海中はさらなり着船の後も、予の爲に諸事周旋し、又船の修補につきては種々心を尽くし数日造船場に居残り都合よく計らい、予の意の如く其工不臼に成就せしは實に

特集

咸臨丸太平洋横断150年

此人の力なりき、予屢其労を謝した
ればブルーク日本にありし時、政府より特別の御扱を受けしにより、聊其萬一に報いんため、且は両国かく親睦を結びぬれば是全くフレシメントへの奉公なりといえり、益其偉丈夫なる事を知れり。

また、ポーハタン号士官ジョンストンは日記（『万延元年遣米使節図録』、田中一貞訳）のなかで、送別会の前後に木村は8万ドル入っている鉄の箱をブルックに示し、感謝の意をこめて彼の欲する額を取り出すようすすめたが、ブルックはこれに応じなかつた。「何となればブルック中尉はこの異邦の珍客を自國および国民党に紹介せる先駆者たる一事を以て満足し他には何等報酬を求むる念慮は無かつたから」であつたと紹介している。

ブルックは、「日本と日本人をアメリカとアメリカ人に初めて紹介した名譽」の一ことに満足し、他には何の報酬も求めなかつたのである。

偉丈夫は、よく偉丈夫を知っていたのである。

咸臨丸のサンフランシスコ航海

木村重艦奉行は我慢強い性格で、人の意見はよく聞くが余計な口出しあしはし

ないタイプであつたから、キャプテン・ブルックの間にはトラブルは起きなかつた。

ブルックは生粋の海軍軍人であつたから、船内規律と礼節を重んじる紳士的な態度で木村奉行以下の士官たちに接していた。そのような毅然とした態度に加えて、彼の持つ抜群の帆船運用と大洋航海技術は、咸臨丸乗組員のかたくなな心をほぐすに十分な説得力を持つていた。そういう指導者にシーマンシップ教育を受けたからこそ、咸臨丸は無事に日本へ帰着できたのである。

後年、勝海舟はこの咸臨丸のサンフランシスコ航海について「万延年間に、おれが咸臨丸に乗つて、外国人の手は少しも借りないでアメリカへ行つたのは、日本の軍艦が、外国へ航海した初めだ。」（『水川清話』）と自慢しているが何か空々しい。

ともあれ、咸臨丸のサンフランシスコ航海の成功は日本人による初の快挙であった。



アメリカ海軍のブルック大尉（「木村家」所蔵、横浜開港資料館保管）